

しあわせ

11 月 号



わしが忘れても
阿弥陀さまは
忘れてくださらん

(是山恵覚和上)

「手を合わす母」

秋本番、お取越し報恩講真つ盛りの十一月。広島安芸門徒に限らず北陸から西日本にかけて一月の御正忌報恩講に向けて各家庭や寺院で勤められる。

ところで、幸せとは？と尋ねられてあなたはなんと返答するだろうか？

この世のすべては、壊れてゆく。これを諸行無常とお釈迦さまは示された。健康も財産も人間関係も。ウクライナの惨状はまさにその現実を突きつけている。

いや、ウクライナにとどまらず世界のいたるところで厳しい現実が起こっている。

ミャンマー、シリア、ソマリア、南スーダン数限りない人々が貧困や虐待にあえいでいる。それらの苦悩は他人事ではない。親鸞様はそれを「われらなり」と受け止められた。その現実の中、「幸せ」とは何か？と問われてなんと答えるか？「おかげさま」といえる心を恵まれた人生こそ「幸せ」な人生だ。

法座案内

△法味の会▽

十一月 十八日 午前十時

お話 自坊住職

△報恩講法要▽

十二月 十一日(日) 昼席

十二月(月) 朝席・昼席

講師 浅田恵真 和上

(本願寺派勧学)

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三

栢原山 龍仙寺

電話(〇八二)二八二四八二



今月は、明治から昭和にかけて活躍された是山恵覚和上のことばをご紹介します。広島県世羅郡のお寺に生まれられた是山和上は、のちに本願寺派の学階の最高位である勸学となつて本願寺派の宗学を大きく支え、また龍谷大学でも教授として活躍されました。ご本山のお仕事を退かれたのちは広島のご自坊に帰られました。ご子息が先にご往生され、和上自身もご病気で身体を悪くされるなど、きびしい晩年を過ごされたとお聞きしています。昭和六年に七十五才でご往生されましたが、和上の最晩年のお話です。

当時、歩くこともままならなくなった和上は、朝夕のお仏事は、庫裏から本堂の方に手を合わせてお勤めをされていたそうです。ある朝、いつものように本堂に向つて合掌し、お正信偈を勤めはじめられたのですが、

「きいみよーむりよーじゆによらーい

なあもーふーかーしぎこう・・・」

二行読んだところで和上の声が止まりました。認知症で忘れてしまわれたのですね。一緒にいられた坊守さまが気付いて「ほうぞうぼさついんにじ」と声を添えられました。和上はその声でハッと思い出され、お勤めを再開されましたが、また二三行で止まってしまいました。そのつど声を添えられる坊守さまに助けられながら、いつもの何倍もの時間をかけてお正信偈をおつとめされたそうです。終つてお念仏をいただいて和上が向き直られたとき、坊守さまが言われました。

「病気というものは、残酷なものです。お聖教のことなら隅から隅まで頭に入つておられた和上さまが、朝夕あげておられたお正信偈すら忘れてしまわれるのです。でもさすがに、お念仏はお忘れになりませんね。」

是山和上は、こう答えられました。

「ほうじゃのう、お正信偈も忘れてしまうたのう。いつかお念仏も、忘れてしまう日が来

るじゃろう。ほいじゃが、わしが忘れても、阿弥陀さまは忘れてくださらんけえのう。」
お念仏の教えは、わたしが確かなる道ではないのです。阿弥陀さまが、いつでもどこでも・だれでもの救いを誓われたのは、いつ・どこで・どうなるかわからない凡夫を救うためでした。何が起るかわからない娑婆のなかで、何をしでかすかわからない危うさを抱えて生きているわたしのために、阿弥陀さまが、たった一つの条件もつけず、「まかせよ、すくう」と喚びつづけてくださっている。その如来さまの確かなお慈悲に遇わせていただく道こそが、お念仏でした。

お参りをしていると、お母さんに抱っこされている幼い子どもたちに、よく出会います。お母さんの腕のなかですやすや眠っているあの子たちをみるたびに、気付かされます。一つ確かなもののない命のそのまま、こんなにも安らかな世界があったのだなあ、と。

赤ちゃんは、道がわからないといって、命の意味が見えないといって、泣くことはありません。わからないから、赤ちゃんなのです。それこそ、命の意味どころか、「命」という言葉すらない世界を生きているでしょう。あの子たちが不安そうに泣くのは、お母さんが離れているときですね。言葉を反せば、お母さんのまなざしに包まれていけば、お父さんの腕に抱かれていけば、何もわからない命であつても心配の用事はないのです。むしろそこには、何もわからないからこそ、という壊れようのない安らぎがあるでしょう。

わしが忘れても

阿弥陀さまは忘れてくださらん

ともに、仏さまの御心を仰がせていただきましょう。真実の信心とは、たしかなお慈悲に遇わせていただいている姿であり、わたしの心が確かなることではないのですから。